

---

# SOUND OF HEART

花衣香音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SOUND OF HEART

### 【Nコード】

N1164Z

### 【作者名】

花衣香音

### 【あらすじ】

秋は新米しんべいの英語教師として高校に赴任してきた。他の教師から誘われるが、秋には恋人がいるという。彼女の恋人とはいったい誰なのか。秋の気持ちはどうなるのか。新米英語教師、秋のお話です。

## 新学期 1

秋はこの春から高校の正教員として採用された。  
担当科目は英語。

中学、高校とイギリスの学校へ行っていたので、英語は日本語と同じくらい使いこなせる。  
そのためなのか、新卒にもかかわらず、採用されることができたのかもしれない。

今は卒業してすぐ正教員に採用されるには採用試験でかなり頑張らないといけないと聞いていた。  
秋は採用されてとても嬉しかった。  
教師になるのはずっと夢だったのだ。  
中学時代、勉強の楽しさを教えてもらってから、自分もぜひ教師になりたいと思っていた。

赴任する学校には前に挨拶に行っているし、準備で何度か出勤もした。  
それでも、新学期、教師として学校へ行くのは緊張する。

少し早めに学校に到着して他の先生方に挨拶をする。  
自分用に与えられた机が、すでにこれから教師としての第1日目が待っていることを告げているようだった。

今日は生徒たちの前でも、新しく赴任した先生として紹介される。

あまり人前で上がらない秋だが、緊張はしていた。  
これからはじまる教師としての生活に期待と不安が混じっている。

朝、職員の朝礼があり、始業式の準備、注意点など指示があった後  
体育館へ向かった。

今年、秋の赴任した学校には新卒の秋と、新採の数学の教師がいた。  
この辺りの学校では今年から、数学と英語に力を入れるらしくそれで採用枠があつたらしい。

残りの先生方は何年目かのベテランだ。

その他に移動になった先生方もいたようで、転勤で学校を離れた先生の分、新しい先生方が代わりにやってきたが、みんな別の学校から転勤になってきた先生方なので、教師として新米なのは英語担当の秋と数学の田上という新採の教師だけだ。

移動になった教師と、新しく採用になった教師の紹介が始まった。

「…では次に、英語担当の坂井秋先生です。1年生の英語を担当し、同じく1年生の副担任になります。」

秋が生徒たちに向かって軽く頭を下げる。

「続いて、田上直輝先生、2年生の数学を担当してもらいます。同じく2年生の副担任になります。」

田上も秋と同じように、生徒たちに向かって、頭を下げる。

紹介が終わると壇上から降りてそのまま始業式に参列していると、

生徒たちから自分たちのことが言われているのが聞こえてきた。

「…ねえ、ねえ…新しい田上先生、かつこいいね。」

「うん、私もそう思った…」

「いいなあ、2年生、田上先生に勉強教えてもらえて…」

「2年じゃなくても、質問しに行ってもいいのかな…」

別の生徒たちからは秋のことを話している声が聞こえてきた。

「…なあ、あの坂井って結構いけてんジャン。」

「…俺も、結構好みかな。」

「まだ若いんだろ。」

「なんか新卒って話だぞ。」

「…ってことは22ってことか。」

「先生、わかりませえーん、とか言って、顔覚えてもらっかな。」

「でもさあ、転勤で来た湊先生の方がカッコイイよね。」

「うん、私も田上先生より、湊先生の方が絶対いい…」

「すごい、大人って感じだしさ…」

「うん…眼鏡かけててクールって感じだよな。」

始業式の間中、生徒たちは新しく来た先生たちの話で持ちきりだった。

## 新学期2

職員室に戻ると、クラスを受け持っている教師たちはそれぞれ自分のクラスへ向かった。

副担任である秋は自分のクラスがないため、そのまま職員室で明日からの授業の準備などをしていた。

「坂井先生、どうですか、生徒たちが学校にいるときとこないときではだいぶ違うでしょう。」

校長が秋に話しかけてきた。

「はい、校長先生。」

今日は新年度の初日なので学活が中心で、実際の授業は明日からです。頑張ってくださいね。」

「はい。」

「坂井先生は生徒たちと一番年齢が近いので、話も合つんじゃないですか？」

「…そうだといいんですけど…」

すぐ近くにいた田上にも校長は声をかけた。

「ああ、田上先生。先生も明日からが授業ですね。」

「はい。僕は明日、1時間目からです。」

「先生も、坂井先生と同じようにまだまだお若い。生徒たちはやはり若い先生に自分の兄や姉のようなつもりで、距離が近いと思う場合が多いです。ぜひ、若い先生方なりに生徒たちの力になって欲しいですね。」

「はい、僕もそう出来たらいいと思っています。」

「それは頼もしい。期待していますよ。」

「ありがとうございます。」

そう話すと、校長は自分の仕事に戻っていった。

「坂井先生…、新卒だとお聞きしてたんですけどやはりお若いんですね。」

「…そうですか…?」

「そうですね。まだ20代初めの頃と、そうでないのでは、違いますよね。」

「…でも、田上先生だって、お若いんじゃないですか?」

「僕ですか?もう26ですよ。普通に勤めてたんですけどやっぱり教師になりたくてね。」

3年ぶりにもう一度教員採用試験を受験したんですよ。」

「…そうだったんですね。」

「坂井先生は1度で合格したんですね。すごいですね。」

「…そんなことないですよ。」

「イギリスに行ってた、と聞いてますが…長かったんですか?」

「…6年くらいです。」

「その間は地元の学校へ?」

「そうですね。」

「それじゃあ英語の方が得意なんじゃないですか?」

「…どうでしょう…自分ではあまりきちんと意識したことはないんですけど…」

「それでも不自由なく話せるんですよ。うらやましいな。ぜひ僕にも英語を教えて欲しいですね。」

田上はどうやら秋の様子を伺っているようだ。

社交辞令というよりは、秋がどういう人間か試しているのだろうか。学校と言う特殊な環境は人間関係がいろいろと大変だと聞いていた。そういう意味でもいろいろと探りを入れているのかもしれない、と秋は思った。

それに、田上は秋に興味を持っているような雰囲気も伺えた。

自分の気のせいならいいのだが、ここは適当にかわしておいた方がいいだろう、と秋は思った。

「大人の方に教えるのは難しいですから、専門の学校へ行かれるといいですよ。」

「…そうですね。でも、なかなかそういうところへ行く時間がないんですよ。」

「…それは、こういう仕事ですから、慣れるまでは仕方がないですよね。」

「確かに…。僕も家に帰ってから授業のことが頭から離れないんですよ。初めての授業は…ってね。」

「それは…私も同じです。明日からですよね。」 >BR<  
「そうですね、まあ、お互いに頑張りましょう。」

そんな話をしていると、3年生の副担任である山本が職員室に入ってきた。

「ああ、若い先生方ですね。生徒たちと同じ教師の1年生ですね。」



「はい、よろしく願います。」

「さつきプリントを渡しに教室をちょっと見てきたんですけど、生徒たちはもう先生方の話をしていましたよ。」

「えっ…そうなんですか…」

「そうですね。田上先生の名前は女子生徒たちにはしっかりと刻まれましたね。」

「…それは…光栄ですね…。」

「それから、坂井先生もですよ。」

「私ですか…」

「男子生徒たちが先生に質問しに行くつてはりきってましたから…」

「…質問…ですか…」

いったいどんな質問をされるのだろうか…秋は、そんなことを考えた。

「まあ、これから徐々に慣れていくと思いますから、頑張ってくださいね。」

「…はい…」

「それから今週の金曜の夜は、明けて置いてください。今年赴任された先生方の歓迎会を開くので。」

場所はまた金曜日になったらお知らせすると思いますが、この先生方はほぼ全員毎年出席されるので、よろしく願います。」

「…はい、あけておきます。」

それだけ話すと、山本は自分の席の方へ戻っていった。

### 新学期3

初日の午前中はほとんど準備で終わった。

学校自体もこの日は午前中しかないので、教師たちも職員室に戻って昼食を取り始めた。

秋はお弁当を持ってきたのだが、どうしたものかと考えていると1年を担当している女性の教師、有吉と一緒に食べませんか、と声を掛けてきてくれた。

「坂井先生、今日は初日で緊張したんじゃない？」

「はい。やっぱり生徒たちが目の前にいると違いますね。」

「でも、明日から授業があるんですよ。」

「はい、明日は1時間目から午前中はずっとあります。」

「そう、頑張つてね。」

有吉と食事を取っていると、他の女性教師たちも秋達に混ざってきた。

女性より男性教師のほうが人数が多いので、こういう午前中だけの授業などのときは比較的みんな集まって、食事を取ることが多いようだ。

お弁当を食べ終え、秋は他の教師たちと話していた。

「坂井先生…新卒でしょ。若いわよね。」

「生徒たちとあんまり変わらないんですよ。」

「先生…22歳？」

「ハイ……」

「いいなあ」

「私もその頃に戻りたい……」

「いいわよねえ……可愛いし、お肌ぴちぴちだし……」

「エ……あの……」

秋は苦笑しながら、話を聞いていた。

こういう現場だと、どうしても新しく赴任してきた教師が話題のターゲットにされてしまうのだろう。

「あんまり坂井先生をいじめるのはかわいそうよ。」

「だって、ねえ。やっぱり若い人にはいろいろ聞きたいし……」

「先生方、これ、結構つらいですよ……」

「あら、愛美先生。」

「だって、去年まで私がいつも先生方のターゲットだったから……坂井先生の今の気持ち、すごくわかります。」

「そう、そう。愛美ちゃんも若かったわよね。えっと、26だった？」

「そうよ。確か家の息子と同じ。」

「馬場先生……」

職場の先生方からいろいろな質問を浴びせられたが、それは同じ職場で働く彼女たちなりの心遣いなのだ、と秋は思った。

こうしてざっくばらんにいろいろと話しているうちに、午前中にあつた硬い緊張が取れ、秋自身すごくリラックスして話が出るようになった。

秋はじめに声を掛けてくれた有吉先生は29歳、愛美ちゃんと呼

ばれていた大谷先生は26歳、この2人が秋と同じ20歳代で、他の先生方はもつとずっと上なのか、秘密、と行って教えてもらえなかった。

でも彼女たちはいつも生徒たちと接しているせいか、一緒に話していると楽しいし話題が若い。

まだ他の男性教師たちと話をしたわけが無いが、こうしてほっとできる先生方がいる職場で良かった、と思った。

明日からいよいよ授業が始まる、気合入れないとね…

みんなお弁当を片付け始め、それぞれ明日の準備を始めた。

秋もお弁当箱を片付け、明日の授業の準備をするために自分の机に戻った。

## 新学期 4

翌日から授業が始まると週末まではあつという間だった。

毎日授業の準備と、生徒たちの様子を見ながらまた次の準備をする。

まだ慣れていない1週目はいろいろな意味で大変だった。

時間があつという間にたつてしまい、授業が終わった後いつも学校に遅くまで残っていて、気づくともうこんな時間、という状態だった。

でもそれは1週目の授業ではあつても秋には楽しいことだった。

ずっとやりたいたいと思っていた仕事だ。

まだ新米だが、毎日が充実していた。

12

「坂井先生、そろそろ行かないと他の先生方に怒られますよ…」

「田上先生…？え…もうこんな時間だったんですね。」

「やっぱり…気づいてなかったんですね…他の先生方はほとんど出発されたようですね。」

今職員室に残っているのは、秋と田上、それに後2、3人の先生方だけだった。

「早く行かないと、怒られちゃいますね。」

「僕もちょうど出るところですから一緒にしましょう。」

目的地が一緒なのに別々に行くのもどうかと思い、秋は田上と一緒に歓迎会の行われる店に向かった。

「坂井先生、どうですか授業は？」

「そうですね…ようやく少し慣れてきたって感じですよ。田上先生は？」

「僕ですか？…まあ、それなりにですね。」

まだお互いに新任教師だ。

2人ともまだ新米、ということに変わりはない。

教科が違ってはいても、指導に関しては経験がないということ、同じようなところで共感するところも多いようだ。

「坂井先生、男子生徒から人気ありますよ。」

「あ…それはきつと年が一番近いからですよ。田上先生の方こそ、私、女生徒からたくさん先生の事聞かれて、返答に困っちゃいました。」

「…どうして返事に困ったんですか？」

「え…どうしてって…先生の誕生日や趣味なんかを教えてって言われても…何にも知りませんからね。」

秋はクスクスと笑いながら答えている。

田上は秋の笑顔を見ながらいろいろなことを話しかけてきた。

新しく受け持った授業のことや生徒たちとのことなどを話していたら、あっという間に目的地の店に着いた。

すでに他の先生方のほとんどは到着して、後は2、3人ほどの先生が来るのを待っている。

秋たちが店についたすぐ後に、残りの先生たちも到着し歓迎会が始まった。

1次会は和やかな雰囲気ですすめられ、顔を知っている程度だった先生方とも話をする事が出来、結局秋はみんなから坂井先生ではなく秋先生と呼ばれることになってしまった。

その1次会も終わり、2次会へと流れていった。

何人かの先生方は帰宅をしたが、ほとんどの先生は次の2次会へも参加するようだ。

2次会はカラオケだ。

秋は湊の横に座ることになった。

「秋先生、だいぶ生徒たちから評判がいいみたいだね。」

「え…あの、湊先生、どんな評判ですか？」

「秋先生の授業はすごく良くわかるって、1年生の生徒が言っていたよ。」

「あ、ありがとうございます。生徒たちにそう言ってもらえるのが一番ほつとします。」

「まあ、俺も最初はそうだったからね。秋先生の気持ち、すごく良くわかるよ。」

「ええ…湊先生も…始めは緊張なさってたんですか？」

「…そりゃそうだよ。」

「でも…なんだか…」

「なんだか…？」

「いえ…湊先生なら、始めからびしっと授業をしてそうなので…」  
「どうして？」

「なんか、そんなイメージが…」

「俺ってどんなイメージ？」

「どんなって…そうですね…手抜きがないというか…完璧というか…隙がないというか…」

「すごい言われようだな。」

そついいながら、湊は笑っている。湊の噂は他の女の先生から聞いた。

授業の質がとて高く、私立の学校からも引拔がひつきりなしに来るらしいのだが、公立の方がいろいろな生徒たちに会えるから、と言つて断り続けているらしい。

生徒たちからもたった1週間の間に、信頼できる先生としてすでに一目置かれているらしいのだ。

それに、眼鏡をかけていても顔がいいということは隠しようがないし、表情が妙に色っぽい。

きびきびとした口調で、しっかりと仕事をこなし、すらつと背が高くサッカー部の顧問もする事になった湊は、女子生徒はもちろん、他の女性教師の間でも噂になっている。

秋自身、何度も他の女性教師から湊の話をされている。

「湊先生、秋先生、2人で話してないで何か歌いなさいよ！先生たちの歓迎会なんだから。」

馬場先生が2人に曲のリストが載っている厚い本を手渡す。

「嫌…俺はあんまり歌は…」

「何言つてるの！若いんだから恥ずかしがたつてしょうがないでしょ。教頭先生もさつきから歌つてらっしゃるんだから。ほら、何か選びなさい。」

湊は苦笑いをしながら本を受け取る。

「秋先生、あなたもよ。」

「私も…ですか？」



「当たり前でしょ。」

「私…あんまり歌、知らないんですよね…」

「何でもいいじゃない、好きな歌えばいいのよ。どうせみんな人の歌なんか聞いてないんだから。」

確かにそうだ。

みんな、始まったときと終わったときは拍手をして盛り上げているが、その間は近くの先生方とおしゃべりをしている。

「ええ…それじゃ、もし歌える曲があったらでいいですか？」

「それでいいわよ。何？何の曲？」

「あの…英語になっちゃうんですけど……それにあるかどうか…」

「無くても何か歌うのよ、わかった？」

「…とりあえず…探してみます。」

秋は渡された本を持って、一つため息をついた。

## 新学期5

湊はさつさと曲を入れさせられ、歌い始めた。

話し声もなかなかいいと思うが、歌もかなり上手い。

ちらりと周りを見回すと、女性教師がみんな湊の方を見ている。

特に愛美先生はもう目が釘付け状態だ。

なるほど、愛美先生は湊先生のことか…

秋はそんなことを考えながら周りの人間を観察していた。

ゆっくりとあたりを見渡している途中で、自分のほうへ視線が向けられているのに気づいた。

誰か見てる…？

そちらへ目を向けると、田上がじっとこちらを見ていた。

田上先生？

秋と目が合うと、田上はにこりと微笑み、秋の方へ手を振ってきた。秋もとりあえず、軽く微笑み返したところで湊の歌が終わり、拍手が起った。

「秋先生、どうだった？」

「は？」

「俺の歌。」

「ああ、とてもお上手ですね。」

「そう？」

「ええ。なんか、皆さん、湊先生の方に視線が集ってましたよ。」

「秋先生は？」

「私？」

「せつかく隣に座ったのに、俺の歌ってる姿、見てくれなかったのか。」

「え…あの…あつ…隣ですから…じつと見てたら変ですよ。」

「…そうだな…」

湊は、秋の方をじつと見ている。

秋は、ちよつとお手洗いへ…と言って席を立った。

湊と田上…

学校が始まってから1週間、2人はさりげなくだが秋との距離を縮めようとしているのは気づいていた。

だが秋に全くその気が無いのだから、これからどうにかしてかわしていかないといけない。

大学のときもそうだったが、友達との集りだと言われ、そのつもりで行ったら合コンで、秋のことを気に入った男から逃れるのが大変だったという経験も1度や2度ではない。

こっちにその気が無いのが、どうして分からないのかな…

秋は、一つため息をついた。

そのとき、愛美が化粧室に入ってきた。

「愛美先生」

「秋先生、さつき湊先生と何を話してたんですか？なんか楽しそう  
でいいなあって思ってた。」

愛美がさりげない感じを装って秋にきいて来た。

「何も話してたわけじゃないんですよ。皆さん、湊先生の方を見ましたよって言うってただけなんです。」  
「そうなんだ。」

愛美が少しほっとしたような顔をしている。

でもまた何かふと思い出したように表情を曇らせて、秋に話かけた。

「でも…湊先生、秋先生のことずっと見てますよね。さっきも見てたし…」

「え…」

「いいなあ…」

「愛美先生…」

「私も湊先生ともっと話したい…」

少しお酒が入って酔いがまわっているのかもしれない。

愛美が少し甘えたような、拗ねたような口調で話している。

他の先生から、愛美ちゃん、とちゃん付けで呼ばれるのは、こついう少し幼い雰囲気があるからなのかもしれない。

「あ、愛美先生、私、馬場先生たちに少し教えていただきたくてあるの、席を替わっていただけでもいいですか？」

「え…いいの…？でも…湊先生、秋先生のこと気に入っているみたいだし…」

「あ…それは…分かりませんが、でも私は愛美先生が思っているような感情は湊先生には無いので…」

「え…やだ…秋先生にも分かっちゃうの？」

「…ええ…」

「もう…やだな…恥ずかしい…」

「あの、それに…、私には別に決まった人がいますから…」

「…え…それって…」

「もちろん職場の人ではないです。同級生ですから…」  
「え…そうなの？秋先生って彼氏いたの？」  
「彼氏というか…なんというか…でもまあ…相手はいますから…」  
「そっか…そうなんだ…じゃあ、秋先生はもう売約済みってことなんだ」  
「愛美先生…確かにそうなりますけど…」  
「ほんとー、良かった。」

心底ほつとしている様子を見ると、もう苦笑いするしかない。  
子供っぽいというか、素直と言うか…

とりあえず、これで湊の視線はかわせそうだ。

化粧室を出て、カラオケの部屋へ戻る。  
馬場先生たち女性の間に秋は腰を下ろした。

「あら、秋先生、湊先生の横に戻らなくてもいいの？」  
「あ、いいんです。愛美先生に代わってもらいました。」  
「ええ〜いいのお〜？湊先生、なんかこっちにらんでるけど…」  
「いえ…私はこっちの方がいいです。」  
「どうして〜？湊先生結構いい感じじゃない？秋先生のこと気にしてるみたいだし。」  
「いえ、でも私は、本当にいいんです…。」  
「でも、田上先生も秋先生のこと狙ってるっばいよね…」  
「さつきも湊先生の横で座って話してるときに、じっと見てたわよね。」  
「うん、うん。私も気づいた。」  
「秋先生、田上先生の方がいいの？」  
「そっかー、秋先生、田上先生だったんだ。」

「え、違いますよ。」

「田上先生の方が、年が近いものね。」

「湊先生っていくつだったけ？」

「確か、今年30じゃなかったっけ？」

「そうそうよ！このあいだ、ぼくも今年は三十路ですって言ったもの。」

「でも田上先生か…。秋先生から見たら湊先生は大人の男って感じだけど、田上先生はもうちょっと若い感じなのかしら？」

「いえ、本当に、私どちらの先生のことそんな風に思っていますから。」

「あら、どうして？もつたいない。この職場、なかなか出会って無いのよ！いい人見つけたら、さっさとキープしておかないと。」

「いえ、本当にいいんです。」

「…秋先生、恋人いるんだ…」

「…えっ、そうなの？」

「そっか、秋先生、彼氏いるんだ。年は？どこで知り合ったの？」

「え…」

「カッコイイの、秋先生の彼氏？」

「あの…」

「背は？どんな雰囲気？」

「先生方…」

秋が困っているとき、ちょうど秋の入れた曲がかかり始めた。

「あっ、それ、私です。」

とりあえず、質問に答えることは後にして、秋は歌い始めた。

## 新学期6

秋はイントロが流れ出すと、その音楽とともにゆっくりと英語の歌を歌い上げた。

ゆっくりとしたバラードの曲で、秋のとても好きな曲だ。

周りの先生方は、秋の歌声に話を一瞬止めると、みんなで聞き入っていた。

「うわあ、秋先生、すごい上手！」

「その曲って、何、何？」

「ああ、この曲は”Sound of Heart”って言うんです。」

「サウンド…？」

「はい。」

「それって、イギリスのグループ、U・STREAMの曲でしょ。」

「田上先生知ってるんですか？」

「そりゃそうですね、馬場先生。今、本国イギリスはもちろんですけど、アメリカでもすごい人気で、

全米、全英のチャートで出す曲がみんなヒットチャート1位を取ってるんですから。」

「私は全然知らなかった…」

「そうだったんだな。俺の息子も聞いてるんだよな…」

「吉沢先生の息子さんですか？」

「ああ。」

「でも、この曲はまだ、U・STREAMがデビューした頃の曲ですよ、秋先生。」

「ええ…田上先生、良くご存知ですね。」

「そりゃ、もう！全米でデビューした頃からのファンですからね。初めて彼らの歌を聞いたときには

もう衝撃でしたね。もうそれから全米デビュー前のイギリスでのアルバムとか聞きまくりましたよ！

秋先生も、U・STREAMのファンですね、この曲をこんなに歌うくらいだから。」

「ファン…そうですね…」

「ボーカルのジェイはすごいですよ！ねえ、秋先生。」

「…そう…ですね…」

「ふうん…でもいい曲ですね。私も今度聞いてみようかな…」

「いいですよ、有吉先生。このグループはお勧めですね。」

「そうなの？それじゃ今度CD探してみようかな…」

「それなら僕のお貸ししますよ。絶対お勧めですから。」

2次会を終え、秋は家に戻った。

久しぶりに遅くまで外で過ごしていたので少し疲れてしまった。

今日はジェイの歌を歌った…

やっぱり彼の歌はすごい…

U・STREAMというグループは4年前にデビューしたグループだ。

曲はほとんどをボーカルのジェイが作詞、作曲をしている。

デビューするとイギリスでじわりじわりと人気が出てきて、一昨々年、アメリカでデビューするとたちまち人気に火がつき、全世界でのアルバム売り上げ数はかなりな数だ。



「ジェイ…本当にすごいよね…」

秋は今日歌った歌を思い出しながら、彼らの曲を思い浮かべる。ベットに入りながら、自然と口から彼の歌が流れ出てくる。

秋の母はイギリスにいる。

中学に上がる前に秋の父は事故で亡くなってしまい、母は秋を連れてイギリスで暮らすようになったのだ。

もちろん、秋の父も母も日本人だ。

だが、仕事の関係で結婚前はヨーロッパにたびたび訪れていた秋の母は、イギリスで仕事をしていくことに決め、秋も中学、高校とイギリスで過ごした。

秋は教師になりたくて大学は日本に戻り、教職を取って今高校で英語の教師をしている。

だが母はイギリスにいたので、年に1度はイギリスに戻っているのだ。

また来週から生徒たちの授業が始まる。

自分も教師として、早く一人前になれるように頑張らないと…

秋はU - STREAMの曲をBGMにしながら、ゆっくりと眠りについた。

## 新学期7

それからの数週間は授業のことで毎日追われるように過ぎていった。

6月に体育祭があるこの学校では、中間前までの間にかなり勉強を進めることになっている。

しかも体育祭の準備と平行して進めなければならず、授業内容をきちんと消化できるように指導もしていかなければならないのだ。

秋の指導は生徒たちに人気で、英語は嫌いだったのに秋に教えてもらうようになってから好きになった、という生徒も大勢いて、2年、3年の英語が苦手な生徒たちも秋に質問をしてくるようになった。

他の学年の英語担当の先生に申し訳ない、と思いつつも、秋は丁寧に生徒たちに指導をしていった。

もともと、他の学年の英語教師は、年配の男性教師と生活指導と部活指導で忙しい教師だったので、秋が、彼らの生徒たちに指導をしているというのはかえって助かるらしく、秋に、

『いつもすみませんねえ』と言うぐらいだった。

そのうち、放課後に補習のような形で英語クラブのようなものが出てきた。

始めは分からない生徒たちに丁寧に教えるため、秋が放課後希望する生徒にだけ指導をしていたのだが、そのうち自分たちも教えて欲しい、と学年関係なく生徒たちが集るようになった。

それが、結局生徒たちからの要望もあり、また学校のほうでも生徒たちから率先して勉強をしようというのは喜ばしいことだということとで、クラブ活動という形で勉強をする事になった。

指導はもちろん秋が行うのだが、好きな英語の歌でも、わからない授業内容でもかまわない。

中学の範囲の部分だつてかまわないのだ。とにかく、生徒たちはこの時間を秋と英語を楽しむ時間として活用し始めた。

生徒たちに英語や言葉の楽しさ、勉強をすることの楽しさを知ってもらいたくて教師を志したのだ。

こんな風に生徒たち自ら学ぼうと言う姿勢の手助けが出来て、秋はますます仕事のやりがいを感じていた。

体育祭の準備に、授業、そして、放課後の指導までこなし、体育祭が終わるまでは目の回る様な忙しさになった。

それでも、秋は教師として働ける楽しさを感じていた。

「坂井先生、俺さこの曲の意味知りたいんだよな。」

「どの曲？」

「ほら、このU・STREAMの新曲だよ。」

「あつ、これは…」

「先生、U・STREAMって知ってる？」

「ええ。知ってるわよ。」

「すごいよな。俺、ジェイの大ファンなんだ。」

「ええー、わたしも、わたしも！」

「え、お前もなの、木崎？」

「うん！歌もいいけど、ジェイ、すごいかっこいいもん！」  
「まあ、そうだよな。まじ、すげえカッコいいし…」  
「普通の女の人たちよりも、ずっと綺麗だよな。」  
「なんか色っぽいっていうか…」  
「声もすごい、カッコいいし…」  
「背、高くて、にっこり笑われたらもうだめえって感じ！」  
「ホント、マジ、かっこいいもんな…」  
「ほんとそうだよね！！！」

生徒たちの話はU・STREAMの話で一色に染まってしまったようだ。

U・STREAMは高校生の間でも人気がある。

「それじゃ、今日はこの歌を中心に、この英文の中にある文法や言葉の意味をみんなで勉強してみようか？」

「そう、それいいかも！」

「ええ〜でも勉強…」

「フフツ。勉強っていつても、ジェイの歌の意味をきちんと追っていくために必要なところを学んでいだけよ。だから、今日出来るところまでやると、そこまでの歌の意味をちゃんとわかるようになるし、そのところの文のつくりなんかも分かるから、きっと他のジェイの歌もものすごく良くわかるようになると思うわ。」

「え、マジ！他の歌も？」

「そうよ。でも今日習ったところの部分が他の歌にもあったらただね。」

「やるやる…！」

「私も！」

みんな口々に、ジェイの歌をやる！と言い始めた。

「それじゃ、歌の方をやる人たちは教室のこちら側に座って。その他をやりたい人はむこう側ね。」

歌以外で質問がある人は、聞きにきてくれてかまわないから。それじゃはじめようか。」

みんな勉強の楽しさを知って欲しい…

ジエイの歌のよさを知ってもらえたらいい…

秋はそんなことを考えながら、生徒たちに指導をしていった。

## 告白1

1学期も後もう少しで終わりになるうとしていた。

夏休みの課題の準備や、期末テストの採点、成績の準備などこの時期はとても忙しい。

それらの仕事を片付けるために、秋は毎日遅くまで学校に残っていた。週末も学校に来て仕事をしているくらいだ。

だが、それは秋だけではないらしく、他の先生達も遅くまで残っていたり、週末出勤していたりする。学校でしていなくても、採点を家に持ち帰ってやっている先生も多くいて本当に大変だ。

その日、秋はようやく仕事を終え家に帰ろうとしたとき、後から呼び止められた。

「秋先生、これから帰宅されるんですか？」

後から声を掛けてきたのは湊だった。

「あ、はい。湊先生も遅くまで残っていらしたんですね。」

「ええ、まあ…でも、今日は秋先生を待っていたんですよ。」

「え…」

「これからちょっとお時間いいですか？」

「え…でも…」

秋はどうしたらいいのか迷っていた。

湊はすっかりとした目で秋を見ている。

その目には同じ職場で働いたあの仲間というのではなく、秋を特別な目で見ている、という色があつきりと出ているのだ。

きちんと断った方がいい…

秋はそう思った。

「ごめんなさい、湊先生。あの、私、そういうのは困ります。」

「…そういうのとは、どういうことですか。」

「あの…」

秋も困った。

ここでいろいろと話すようなことではないだろうし、断るにしても他の教師がいつ降りてくるか分からない。教員用の出入り口で立ったままここで話すのもまずい。

「秋先生、食事をしながら話をしたいんだ。」

「え…」

「それに、ここではまずいことは秋先生も分かってるんだろうし。」  
「…」

湊は、始めからそのつもりでここで声を掛けたのだ。

ここで声を掛ければ、秋が断れないだろうと踏んだのだ。

湊としては、2人で話をしたいと思っていた。

だが、秋の様子から電話などでは絶対に返事はもらえないと感じていた。

秋が自分の事はなんとも思っていないのはわかっていた。だが、それは自分のことを知ってもらっていないからだと湊は思っている。

同じ職場の愛美は自分に気があるようだが、湊には全く興味が無い相手だった。

愛美から、秋には恋人がいるときかされたが、だからどうだと言うのだ。

それに、秋が男と会っているような気配は全く無い。

自分や他の男を遠ざけるために、わざとそんな嘘を言ったのではないかと湊は思っていた。

それならもつと近づいて、自分の気持ちを伝え、自分のことを知ってもらいたいと思ったのだ。

「秋先生、別に襲うつもりはありませんから、そんなに困ったような顔をしないで下さい。」

「…え…」

「とりあえず、行きましょう。」

湊は秋に声を掛け、ゆっくりと話が出来るように食事に連れ出した。

食事をしながら学校での様子を話し、ギクシャクした雰囲気少し和んだところで、湊が話を切り出した。

「秋先生、俺とちゃんと付き合いませんか？」

「…それは、ごめんなさい。出来ません。」

「どうして？俺のことを知らないのなら、これから知っていけばいいでしょう。」

「そういうことではないんです。私には、湊先生に特別な感情はあ



りませんから。」

「今はそうかもしれないけど、それはこれから付き合っていけば……」  
「それに、私にはもう決まった人がいることを湊先生はご存知でしょうか。」

秋は自分を見つめている湊に向かってはつきりと口にした。

「それは、他の先生から聞きました。」

「それなら、私が湊先生とお付き合いできないって分かっていただけますよね。」

「……秋先生、本当に他に恋人がいるんですか？」

「え……」

「秋先生はいつも遅くまで学校で仕事をしているし、週末もほとんど学校で仕事をしていますよね。」

「仕事をしている以外に時間はないようですね。それでは恋人がいると言っても信じられません。」

「俺を遠ざけるためにそんなことを言っているとしか受け取れません。」

「……湊先生……」

「俺が嫌い、と言うことですか？」

「……湊先生、先生がどう思われていても私には決まった人がいます。」

「でも、その恋人はどこにいるんです？」

「湊先生には……そうですね……ちゃんとお話したほうがいいかもしれませんがね。真剣に思っていて下っているようですよ、なおさら嘘をつくのは失礼ですから。」

「秋先生、それじゃやっぱり恋人がいると言うのは嘘なんです。」

「湊先生……恋人……という言い方は正確では無いのかもしれませんが。」

「やっぱり……」

「私には恋人がいるのではなくて、夫がいるんです。」

「え……」

「私、結婚していますから。」

## 告白2

「…結婚…？」

「はい。」

「でも…」

「お互いの仕事の関係で、今は別々に暮らしています。」

「え…」

「私の夫はイギリス人ですから…彼は…今、イギリスにいます。」

「そんなこと…」

「ですから週末デートも出来ないし、2人で一緒にいるところを見かけることって無いと思いますよ。」

「電話代がすごくかかっちゃいますけど、今は仕方ないですから。」

「結婚つて…でも…秋先生はまだ…」

「私、18で結婚したんですよ。彼も18でしたから。」

「え…」

「あつ、子供が出来たからとかいうわけじゃないですよ。」

「……」

「お互いにとても大事な人で、これから勉強をしていくのに今はどうしても一緒にいられなかったの…」

「秋先生…」

「彼は、その時一緒に居れても居れなくても、すぐ結婚するって決めてたみたいですけど。」

秋は少し恥ずかしそうな表情をしながら、ちよつと肩をすくめて見せた。

「…それじゃ、本当に…」

「ええ。湊先生のお気持ちを受け入れることは出来ないんです。私

は、彼じゃないとだめなので。」

「秋先生……」

「ごめんなさい、湊先生。」

秋の話し方で、それが作り話ではない、と湊は感じた。

秋には本当に決まった人がいたのだ……

湊は大きく一つため息をついた。

「結婚してるんじゃない……あきらめるしかないってことか……」

「すみません。」

「相手がいても奪ってしまおうと思ってただけだな。秋先生の様子じゃ無理っぽいですね。」

「無理ですね。」

「……秋先生のご主人って、そんなにカッコいい奴なのかな？」

「カッコイイですよ。」

「俺よりも？」

「はい。」

「即答ですか……。」

「だって、本当にかっこいいんですから。」

秋は悪びれもせず、嬉しそうにニコニコと自分の夫のことを話した。

「……正直、自分でもそれなりに自信あつただけだね。」

「ああ、そうだと思いますよ。湊先生、十分素敵ですよ。」

「でも、秋先生のご主人はその上なんですよ。」

「はい。もう、目眩がするくらい。」

「……のろけてます？」

「あ、わかります？」

「……はあ……一応、俺振られたんだから、あんまりいじめないで下さいよ。」

「そうですね、でも、一生懸命お断りしているのになかなか引き下がっていただけなくて、私も大変だったんですよ。」  
「そりゃ、好きだから仕方がないでしょ。」  
「すみません、湊先生。」  
「…秋先生、…すみませんって…あんまり思っていないでしょ。」  
「ちよつとは思ってます。」  
「ちよつとだけですか？」  
「ちよつとだけです。」  
「全く…もう完敗です。」

完全に諦めがついたのか、湊とは逆に打ち解けたように話をすることが出来た。

「秋先生、どうして結婚していることを秘密にしてるんですか？」  
「ああ、それは秘密にしてるわけじゃないんです。」  
「だって、みんな秋先生は独身だと思ってるし。」  
「それは私の年齢を考えてだと思えます。校長先生には私は既婚者だと伝えてありますし、ちゃんと書類にもそう記入してあります。」  
「え、そうなんですか？」  
「そうですね。でも、プライバシーにかかわることなので、そういうことってわざわざ表に出したりしないですよ。それに、自分からいい触れ回ることもないし…」  
「そりゃ、まあ…」  
「それに…」  
「…?」

「実は、教頭先生からまだ独身の女性が多いからあんまり刺激をしないように、結婚してるというよりは恋人がいる、位にとどめておくほうがいいですね、って言われたんですよ…」  
「え…」  
「隠すことではないのももちろん、みなさんに結婚していることが

分かったらそれでもいい、という前提でそういう風になったんですけど。」

「え、そうだったんですか。」

「はい、私の結婚した年齢が早かったこと…それに彼のこともあるし…」

「秋先生のご主人のこと？」

「ええ。彼は外国人ですから、いろいろと聞かれてそれに答えていくのもちよつと…」

「ああ、確かにそうですね。女性は特にそういう話が好きでしょうから。」

「はい。」

「分かりました。それなら俺も黙っていますよ。秋先生のごことは、湊先生…」

「まあ、でも、秋先生と話すとやっぱりいろいろと刺激もあるし、話してて楽しいですよ。恋愛感情抜きで友人としていられたらナと思いますね。」

「湊先生って…大人ですね…」

「うーん、まあ切り替えしが早いのか…」

「それに、女性経験豊富そうですね。」

「…秋先生…」

「違います？」

「否定できません。」

始めてちゃんとした友人として、2人は大笑いした。

「秋先生のご主人に会って見たいですね。どうやって先生を口説いたのか、教えてもらいたいな。」

「それは…まあ…そのうちに会えると思いますけど…」

「いつごろですか？」

「さあ？」

「秋先生？」

「彼の仕事にもよると思います。」

「忙しそうですね、ご主人。」

「忙しいですね。とつても。」

「どんな仕事をしてるんです？」

「秘密です」

「は…？」

「そのうち…分かるかもしれない。」

「秋先生…」

秋は楽しそうにニコニコと笑っている。  
湊もあきらめたようにため息をついた。

### 告白3

夏休み前の最後の英語のクラブ活動をしているときに生徒がU・S  
TREAMの話を始めた。

「坂井先生、この夏初めてU・S TREAMが日本にくるんだよ！  
知ってた？」

「それは、ね。知ってるわよ。」

「やっぱり、坂井先生もU・S TREAMのファンなんだ。」

「うーん、まあそういうことね。」

「先生チケット取った？」

「…チケットは…」

「ああ、やっぱり先生も無理だったんだ。俺もだめだったんだよな  
…」

「フッフ… 私とったよ！お兄ちゃんの手がスポンサーやってる  
らしくて、もらっちゃった」

「ああーずりー！！！」

「俺もチケットゲットしたぜ。」

「ええー、何でだよ。お前もコネかよ！！！」

「いや、俺、電話しまくったもん。」

「俺だって、でも電話つなげんねえーし…」

「ま、日ごろの行いの差だな。」

「なんだよ、そんなの関係ねえーだろ。」

U・S TREAM初の日本公演のことで生徒たちは盛り上がって  
いる。

「ほら、みんな。チケットのことは後で話して頂戴。今日は、夏休



み前最後だから、特別にU・STREAMの曲を流して、それを使って進めましょう。」

「えー、先生、曲流してくれんの?」

「ええ。紙とにらめっこよりも、実際に耳で音を聴き分けてもらおうと思って。」

「U・STREAMの曲だったら、俺ばっちり歌えるぜ!」

「そう?」

「任せてよ。」

「それじゃ、みんなで始めてみるね。」

クラブ活動が終わり職員室に戻ってみると、田上が秋を待っていたかのように声を掛けた。

「秋先生!」

「田上先生...」

湊にはきちんと断りを入れたが田上とはそういう話をしたわけではない。

以前とは違って、湊とは仲のいい友人として気軽に話をするようになったが、田上は湊と秋が最近仲良くなったと勘違いしているらしく、以前より頻繁に声を掛けてくるようになった。

田上先生にもちゃんと断らないと...

一つ小さくため息をつくとき、秋は田上の方に向かって返事をした。

「田上先生、あの、なんででしょうか?」

「秋先生、U・STREAMのチケット取れました?」

「あ、それは…」

「やっぱりチケット取れなかったんですね。」

「え、いえ、あの…」

「僕、取れたんですよ、チケット。一緒に行きませんか？」

「え…あ…ごめんなさい。別の方を誘ってください。」

「え、秋先生、行かないんですか？」

「…あ、私、行きますけど…」

「先生もチケット取ったんですね。それじゃ、一緒に行きましょう。」

「え…あの、ごめんなさい。それはもう約束があるので…」

「…それって…湊先生と…ですか？」

「は？」

「約束って、別の人と行くってことですよね。」

「……」

「俺がどうしたって…？」

「あつ、湊先生…」

「あつ……」

秋と田上が話しているところへ湊が職員室に入ってきた。

「田上先生、秋先生が困ってるんじゃないですか？こんなところで個人的な話をしていたら。」

「あつ……」

秋を見ると、確かに困った顔をしている。

「今は、たまたま来たのが俺で他に先生方がいなかったから良かったけど、他の先生がこんな様子を見たらどう思う？」

「それは…すみません…あのでも…」

「…秋先生、夜、呑みに行きませんか？田上先生も一緒に。」

「え……」

「別に予定は大丈夫ですよね。」

「ええ……」

「田上先生は？」

「僕はもちろん空いています。」

「それじゃ、今日、夜行きましょう。」

## 告白4

「…それで…秋先生は湊先生と付き合ってるんですか？」  
「そうだったらどうする？」

3人で飲み始め、少し食事もお酒も進んだところで田上がとうとう話を切り出した。

「え…じゃあ、秋先生は…もう…」

田上ががっくりとした様子を見せる。

「はあ、もう、湊先生、誤解するようなことを言わないで下さい。」

「えっ、じゃ、秋先生、湊先生と付き合ってるわけじゃ…」  
「違います。」

「それなら、僕の彼女になってください！」

お酒を飲んでい、酔った勢いもあるのか、田上が秋に言った。

「ごめんなさい。それは無理です。」

「え、どうしてだめなんですか？」

「私…もう決まった相手がありますから。」

「…恋人…ですか…？」

秋は答えるか、どうしようか、考えあぐねているようだ。

「秋先生、田上先生も本気みたいだし、ちゃんと言った方がいいで

すよ。」

「…そうですね」

「ちゃんと言うつて…湊先生、お2人つて何かあるんですか…？」

「…あつたらいいですけどね…」

「湊先生…」

「田上先生、俺も振られたんですよ。」

「え…」

「秋先生、田上先生にもはっきり言った方がいいと思いますよ。」

「…そうですね…田上先生。」

「秋先生…」

「私…結婚してるんですよ。」

「…え…」

「それつて…」

「秋先生は、人妻つてことですよ。」

「それは…え…ええ…！ちょっと待ってください、秋先生つてまだ若いんじゃない」

「若いですけど、結婚してます。」

「だって、秋先生、まだ22でしょ。」

「私、18のときに結婚しましたから。」

「18つて…」

「もうすぐ結婚して5年になりますね」

「え！！！！」>BR<

「あ、相手は？先生、相手は誰なんですか？」

「学校の同級生です。」

「同級生…」

「イギリスにいたときの同級生ですよ。田上先生。」

「…そんな…」

「私は日本で仕事をしていますけど、彼は違いますから、だから今は別々に暮らしていますけどね。」

「別々に…ですか？」

「はい。私も彼も、自分たちのやりたいことがあるので、そうすることに決めました。」

「…寂しくないんですか…?」

「…そう思うときもありますけど、彼がすごく頑張っているの、私も頑張らないとって思ってます。」

「でも、それじゃなかなか会えないんじゃない…」

「会えないですね。」

「秋先生…」

「お互いが、それぞれ頑張ろうって決めたことですから。」

「…そうですか…」

「…というわけだ。」

「湊先生…」

「秋先生、良く…頑張りますね。」

「そうですね。でも、電話代すごいですから…」

「…そうでしょうね…」

田上が一つ大きいため息をついた。

「秋先生の旦那さんに会ってみたいですね…」

「…彼に…ですか…?」

「そうですね。」

「俺も是非会いたいですね。」

「そうですねえ…」

「ご主人は戻ってこないんですか?」

「…今度…日本に来るみたいですけど…」

「えっ、そうなんですか?それなら是非…」

「あ…でも、すごく忙しいみたいなので…」

「…そんなに忙しいんですか?…」

「ええ…」

「何の仕事をしてるんです?秋先生のご主人。」

「…仕事…ですか…？」

「俺も聞きたいですね。この間、秘密って言われちゃいましたから。」

「…うーん…やっぱり…秘密ですね。」

「秋先生！」

「だって、彼に迷惑がかかっちゃいますから。」

「どうしてですか？何か知られちゃまずいことでもあるんですか？」

「…あるような…無いような…」

「秋先生？」

「あの、彼には伝えておきます。」

「そうですね。今度、ご主人とも一緒に飲みたいですね。」

「…それは…多分無理だと…」

「どうしてですか？」

「たぶん、無理だからです。」

「なんだかなあ〜」

「…秋先生…ご主人って…いや、いいです。」

湊は何かいいかけたが何かを考えるように言葉を止めると、秋の方を見ている。

田上は、何度もため息をついていた。

## 夏休み1

学校は夏休みに入り、職員室にいる教師の数もまばらになる。

秋は資料を作ったり整理をしたり、また2学期以降に行う授業についての準備や、希望生徒の補習授業の準備などをしていた。

「秋先生、今日も学校に来てるんですね。頑張りますね。」

「田上先生、先生こそ今日も部活ですか？」

「まあ、そんなところです。」

田上と湊、そして秋の3人で飲みについて秋が結婚していること告げた後は、田上は以前のように秋をあいう形で誘うことはなくなっていた。それでも秋によく話しかけてくるが、同じ仕事場の仲間という感じだ。

湊も、前以上に秋に気軽に話しかける。

「もうすぐ、U・STREAMの日本公演ですね。」

「あ、そうですね。」

「秋先生も行かれるんですね。」

「ええ……」

「ご主人と……？」

「……それは……まあ、いろいろとあるので……」

「お一人で行かれるんですか？」

「……そういうことになりますね……」

「それなら一緒に行きましょうよ。」

「……」

「秋先生？」



「ごめんなさい、U・STREAMのコンサートは一人で行く決めていたので、田上先生はどうぞ別の方と行ってください。」

「え、でもせっかく同じ会場に行くのに…」

「会場へ行く前にいろいろと用事もあるので…ごめんなさい。お約束は出来ないんです。」

「はあ…しょうがないですね…」

田上は大きいため息をつく。

「秋先生、ほとんど毎日学校来てるんじゃないですか?」

「そうですね。家に居ても別にすることが無いですし、ぼーっとしてるんだったら、仕事をしている方が楽しいですから。」

「楽しい…ですか?」

「ええ、とつても。」

「すごいなあ…」

「だって、私ずっと教師になりたかったんですよ。子供たちに勉強の楽しさを知って欲しくて。」

「…そうなんですか?」

「はい。だから今、頑張れるわけなんです。」

「…本当に頑張ってますよね。秋先生の補講、すごく分かりやすく生徒に評判いいですからね。」

「それはすごく頑張ってますから。」

「昨日も教材作ってましたよね。」

「ええ。少しでも生徒たちが興味を持つように、それからより分かりやすいように考えてます。」

「僕も、秋先生のような先生に英語を教わりたかったですよ。」

田上は笑いながら自分の席のほうへと向かっていった。

田上が職員室から出て行った後、有吉が入ってきた。

「秋先生！」

「有吉先生、先生も今日は出勤されていたんですね。」

「秋先生もでしょ。毎日来てるみたいだし、すごいわね。」

「そんなこと無いですよ。まだ分からないことも多いし、資料や教材ももつと作ってみたいですから、

夏休みは時間があつて、ちょうど時間を掛けてじっくり作成出来ます。」

「頑張つてね。」

「はい。」

「ねえ、それよりも秋先生はU・STREAMのコンサートには行かないの？」

「え…行きますけど…」

「本当！秋先生、U・STREAMのファンだから絶対行くと思つたの。」

「ええ…」

「私も行くの！一緒に行かない？」

「あ、ごめんなさい先生。コンサートに行くことは行くんですけど、ちよつと用事があつてたぶん一緒に行くのは時間的にも無理かなつて…」

「そうなの…どうしてもだめ？」

「ええ。用事が、たぶんギリギリか、ちよつと超えるかかかると思うので、遅れてしまつかもしれないんです。だからご一緒させていただくと先生にも迷惑がかかるので…」

「え…そっか…それじゃ、しょうがないかな…」

「有吉先生もU・STREAMのファンなんですか？」

「んー実は、この間、田上先生からU・STREAMのCD借りただけで、聞いてからすつかりはまっちゃつたのよ！」

「そうなんですか…」

「だから、一緒に行く人がいればナつて思つただけだね…」

「あの…田上先生は行かれるみたいですけど？」

「え…ウン…そうみたいだけど…」

「有吉先生…？」

有吉の顔が心なしか少し赤くなっている。

「先生…あの…田上先生のこと…」

「え…！やだ、違うって…あ…あのね…あつ、ほら、田上先生、私と行くのは同じ職場の人間だから気にするかなって思ったから。」

「…先生…」

「あ、あの…秋先生は、ほら、同じ女性同士だし…ね…あつ、私、もう行かなきゃ。」

そつ、それじゃあ、秋先生、またね。」

顔を赤くしながら、有吉は職員室を出て行ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1164z/>

---

SOUND OF HEART

2011年12月6日00時09分発行